

# 川に親しむ

手押し漁の達人

あいだ いずみ

藍田 泉さん（西伯郡岸本町）

社会福祉法人 岸本町社会福祉協議会 会長

藍田さんは、なんと「手づかみ」で鮎を捕まえるという、鮎捕りの達人です。

日野川では初夏から秋にかけて、鮎釣りを楽しむ方を多数見かけますが、私たちが普段目にするのは、「おとり鮎」という生きた鮎をつけて釣り竿で釣る「友釣り」というスタイルがほとんど。ところが藍田さんは、半そでシャツにゴム製のズボン、そして草履という姿で、道具といえば魚を入れるために腰につけている「びく」くらい。まさに「素手」で鮎を捕まえるのです。

藍田さんが鮎に出るのは、日がすっかり落ちた夜9時ごろ。あたりが真っ暗になった中で、流れの速い日野川に慎重に入っていきます。川の中ほどになると、水面に顔があたりそうになるまでかがんで水の中に手を伸ばし、ゆらゆらと手探りをしていきます。すると次第に両手に鮎が当たる感触が、その瞬間、ここそとばかりに鮎をパッとつかむと、腰につけた「びく」の中に素早く入れていきます。

一回の漁は約40分程度。この間に40～60匹が捕れるそうです。ちなみに友釣りの場合は1日で10匹程度の釣果が普通です。藍田さんはこんな調子で昨年はなんと年間980匹もの鮎を手づかみで捕らえているのだそうです。



親子2人でとったあゆ



藍田 泉さん

藍田さんは今年で72歳。「手押し漁」をはじめたのは10歳のころで、父親に連れられてはじめてのがきっかけでした。以来60年もの間、毎年夏になると日野川での漁を楽しんでいます。

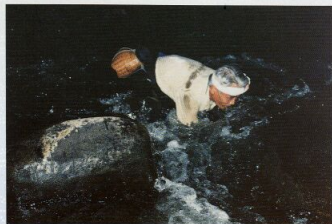
手押し漁の魅力は「一番は、お金がかからないこと」だと笑う藍田さん。自然の中で川と一体となって、鮎と対話しながらのように捕らえていくのが楽しいのだそうです。川に入ればどこに鮎がいるのか、だいたいわかるのだとか。

しかしこの漁法は、最近ではほとんど見られなくなりました。藍田さんはこの漁法を二人のお子さんに伝授されているそうです。さらに、この伝統漁法を地域に伝えていこうと、岸本町が中学生を対象に実施する週末活動としてこの夏から「手押し漁」を体験する「鮎の手押し塾」をスタートしました。岸本町内の12人の中学生たちが参加しています。

今年はいいこの天候で、実際に漁を体験する機会が少なかったとか。しかし参加した子ども達は、初めて自然にふれ合うことに大きな喜びを感じているそうです。

「最初はなかなか出来ないものですよ。川に入って、鮎が手に当たったというだけで上出来です。生きた鮎をはじめて見た、という子どもさんもありましたね」と、その時の様子を藍田さんは笑顔で語ります。

日野川ではここ数年、鮎の姿が減っています。しかし藍田さんは「日野川はあまり昔と変わっていないですよ。このあたりでは一番自然に近い川なんじゃないでしょうか」といいます。そして「もっとたくさんの人に川に入ってほしいですね。ぜひ親子で体験してほしい。日野川の魅力を子ども達に伝えていきたいですね」とのメッセージも。その笑顔は、日野川の水面のように輝いていました。



手押し漁のようす